

北海道地域づくりフォーラム

北海道の新しい価値創造のヒント

去る10月15日、ガーデンシティ札幌きょうさいサロンで「北海道地域づくりフォーラム」が開催されました。昨年の5月から東京で開催されていた「地域カフォーラム」に参加した有志が、ぜひとも北海道でもこのフォーラムを開催したいという熱意から開催されたものです。基調講演に哲学者の内山節氏を迎え、パネルディスカッションには信念を持って地域で活動をする方々が登場しました。

本稿では、特に北海道で活躍する方々が登壇した第2部のパネルディスカッションにウエートを置いて紹介しながら、これからの北海道の価値創造のヒントを探ります。

基調講演

暮らしの原点を問い直す



内山 節氏
立教大学大学院21世紀
社会デザイン研究科教授

哲学者の内山節氏の「暮らしの原点を問い直す」と題された基調講演は、これまでの内山哲学が東日本大震災をどのようにとらえているのかという点を軸として、近代的世界の要素としての資本主義、国民国家、市民社会、近代技術の限界を受けて、多様に展開する「さまざまな価値共有」の意味について問い直すものでした。



第1部パネルディスカッション

地域に貢献する経営者の企業哲学と人生観

内山氏の講演を踏まえて、第1部のパネルディスカッション「地域に貢献する経営者の企業哲学と人生観」が行われました。パネラーは、雑誌『かがり火』発行人の菅原歎一氏が、これまで全国を駆け回り築きあげてきた人的ネットワークから選ばれた方々です。



コーディネーター
菅原 歎一氏
雑誌『かがり火』発行人



パネラー
松場 登美氏
石見銀山生活文化研究所

島根県石見銀山生活文化研究所の松場登美氏。復古創新。衣、食、住。古きに学び、未来につながっていく「里山スタイル」を作り上げていく。十年近い年月をかけて完成した古民家を再生した本社。もてなしの宿「他郷阿部家」。このままでは絶滅してしまいそうな「布おむつ」の生地新たな活用。アイデアと素材と技術だけではなく、時間という要素をも、ものづくりの哲学に取り入れている。



パネラー
東谷 望史氏
馬路村農業協同組合長

高知県馬路村農業協同組合長の東谷望史氏。いわずとした「ゆず」の村。全国に名の知れた成功事例としてよく知られている。「村の人々」を主人公にしたマーケティング手法や、商品開発力。村を巻き込んだ有機栽培の取り組みを進めるために農協は化学肥料、農薬を売らない。周辺景観をつくる雑木からなる「ゆずの森」構想。作業風景を見ることのできるオープンな工場や事務所など

の、単なる商品開発ではなく、その背景にある村づくりや職場づくりの話。便利になることが必ずしもまちづくりにつながるのではないことを話された。

長野県グリーンファーム会長の小林史磨氏。当初、お客は誰も来ないといわれた場所に60人の農家からスタートした直売所は、現在出荷者約2,150名を抱える日本一元気な直売所として知られるようになった。かつて農協王国といわれた長野県で直売所を開設することの大変さについて「カラッ」と話す小林氏の軽妙洒落な話の中に、実践者としての誇りと自信がにじみ出る。自ら「直売所のコンサルタントから見れば、セオリーからはずれた」とおっしゃる経営哲学。直売所は単に出品者が商品を売る場所ではない。主人公である生産者もグリーンファームで生活物資を購入する消費者となるのだ。物々交換の場所としての市場の機能を果たしているといえよう。単なる取引ではなく、その根底にある「感動」が人を引きつけるのだという。



パネラー
小林 史磨 氏
グリーンファーム会長

て「カラッ」と話す小林氏の軽妙洒落な話の中に、実践者としての誇りと自信がにじみ出る。自ら「直売所のコンサルタントから見れば、セオリーからはずれた」とおっしゃる経営哲学。直売所は単に出品者が商品を売る場所ではない。主人公である生産者もグリーンファームで生活物資を購入する消費者となるのだ。物々交換の場所としての市場の機能を果たしているといえよう。単なる取引ではなく、その根底にある「感動」が人を引きつけるのだという。

第2部 パネルディスカッション

北海道の新しい価値創造のヒント

仲間をつくる

パネルディスカッションの第2部は、震災を契機として変化した価値観について、美瑛町でペンションを営む谷尾恵氏の震災後の活動の話からスタートしました。

今年6月、石巻市の避難所となっていた渡波小学校にいた55名を美瑛町に呼び、短期間ではあるが滞在してもらって「ちょこっと旅」を実施。何かしなければという思いと現実とのギャップに悩む日々を送っていたが、大きなことはできなくても、顔の見える関係からできることがあるのではないかということで取り組み



パネラー
谷尾 恵 氏
ペンション「POKROK」
オーナー

を実施した。以前に避難所にボランティアで行っていた知り合いの看護師さんの思いが谷尾氏を通じて、無償の輪として拡がり、旅の実現に結び付けた。

相馬行胤氏は、まさに震災の直撃を受けた地域である旧相馬藩の34代目藩主である。ご本人は大樹町で育っているが、有名な「野馬追祭り」には毎年総大将として参加し、相馬でもビジネスを展開されてきている。アメリカで肉牛の修行をした先代が放牧で牛を飼える環境を求めて移住したのが大樹町の拓進地区であり、現在は日本でも珍しい肉牛の繁殖、肥育の一環経営を行っている。

土地と水の豊かな大樹の地で、ここでしかできない生産物をつくるのが自分の人生にあてがわれたテーマであったと相馬氏はいう。そして今回の震災を受け、一次生産者として安全なものを安定的に提供するという根本を再認識した。福島県で行っていたシイタケ栽培部門を閉鎖せざるを得ない結果となったが、これを機に物事をなす方法論が180度変わった。これまではトップダウン、資本の力で強引にでも地域を変えられるのではないかと思っていた。しかし今回の震災で、これが日本なのかと見間違ふ惨状を目の当たりにして、資本や外部に頼らずに地域にある宝を再認識して地域づくりを進めること、そしてそのために地域の仲間を募るといふことの重要性に気が付いたという。

NPO法人「森の生活」代表の奈須憲一郎氏は、北大の大学院を出て、「地方自治こそ民主主義の原点」という言葉を実践するために下川町役場に飛び込んだ理論派である。役場が主導した地域づくりの限界を感じ、経済活動を柱にNPO法人「森の生活」で、平和で持続可能な社会をつくるために、資本主義を民主主



パネラー
相馬 行胤 氏
柏台牧場代表



パネラー
奈須 憲一郎 氏
NPO法人「森の生活」
代表

義がコントロールできる社会システムを作ることを目指した活動をさまざまな方面から進めている。

奈須氏は、今回の震災を受けて、これまで未来に希望を持ちながら行ってきた活動に絶望しかけたという。放射性物質が舞う世の中でどうやって子供たちを育てていけばいいのかと。しかし、自分がやってきたことを下川町でやっていくしかない、改めて決意したという。

今回の原発事故は、推進派反対派ともに「異質な他者」と向き合うことをあきらめてしまった結果だったと指摘する。対話が行われずにきてしまったことの結果なのではないかと。ぶつかり合いのどっちが勝つかというゲームではなく、相手といかに対話を進めていくのかということが必要だと話された。



パネラー
尾田 栄章 氏
NPO法人渋谷川ルネッサンス代表

NPO法人渋谷川ルネッサンス代表の尾田^{ひであき}栄章氏。蓋で覆われてしまった春の小川の舞台となった渋谷川の再生に取り組む。国土交通省の河川局長時代ではなく、やめた今の立場だからこそ、トップダウンではなく、地域に住む人間の活動として、ボトムアップで活動を行っている。

日本がなぜ原子力に依存するのかという政策の背景を紹介しながら、エネルギー自給を考えるとときには、やはり石油がなくなったときにどうするのかという議論をやらないといけない。そして、機能不全となっている行政システムをどう構築していくのが課題であると指摘された。

これまでも異質な人々が集まり、地域を形成してきたのが北海道であった。パネラーの方々は地域の中でいかにして仲間をつくり、活動を広げていくのかということに取り組まれている。活動を持続的に続けるためには、仲間が必要だからだ。谷尾氏はいう。「ちょっと旅」の最終日に参加者、関係者含め総勢60名ほどで行ったバーベキュー。何かしたいという思いが、多くの人たちに支えられて実現した光景に涙したとい

う。こうした取り組みを継続するためには、「自分たちだからできたという意識ではなく、こんな自分たちでもできたね」という意識が大事だという。人が大好きという谷尾氏の人付き合いのモットーは相手を否定しないことだ。そうしたしなやかなスタンスで、いつしか周りを巻き込んでいくつもの活動を展開されてきたのである。

奈須氏も価値観の違う人を認め合うことの重要性を指摘された。さらに、「弱さの情報公開」として、自分の弱さをさらけ出すことで、本当に支え合える仲間づくりにつながるという。

これからの北海道を考えるとときにもやはり、異質な人たちと向き合いながら目的へ進むことが重要だと感じさせられました。

未来に向けた覚悟



コーディネーター
小林 国之 氏
北海道大学大学院農学研究院流動研究部門助教

第1部のパネルディスカッションでは、商品を介して価格だけでは交換されないさまざまな結びつきが生まれていることを学ぶことができました。

相馬氏が取り組んでいる「Tonosama Beef Burger (とのさまビーフバーガー)」を開発する際に、「自らの牧場経営を顧みたときに、数あるブランド牛の中で、なにが特徴だろうか」と考えた。日本一うまいのかということ味の評価は人それぞれである。そうした中で何が自分たちの宝なのかと考えたときに、かつていた三百諸侯の殿様で肉牛生産を行っているのは多分自分だけということに気が付いた。そしてそれを冠したハンバーガーを展開することになった。「偉そうに聞こえるかもしれない」と自らおっしゃったが、殿様自らが「殿様」という名前を商品につけることの覚悟はわれわれが想像する以上に重いに違いない。千年続く名前の重さを十分に自覚し、自身と祖先のすべての責任を背負い込む覚悟をその名前に込めたのである。

基調講演をされた内山氏が以前、「自分が社会とどう関わっているのかを実感できる社会」の重要性を指摘されていたことがある。パネラーの方々は、社会の中で自分のやるべき役割を足下から作り上げようとされてきた方々なのだと思う。その意味で「殿様」という社会システムのなかで、覚悟を決めている相馬氏の話は、社会の中での自分の役割を認識するという意味でひとつの象徴であった。

石見銀山生活文化研究所の松場氏は、地域の方々を集めて集合写真を撮りそれをカレンダーとして配布している。20年ほど前から始めたその取り組みの目標は50年間続けることだという。未来に残すための仕事を今始めることの楽しさを話されていた。

これまでの北海道は、国の援助を受けて近代化を目指し合理化の道を突き進んできた。しかし、そうした近代合理主義や資本主義、民主主義が危機を迎えているのが現代である。今後50年100年持続するための社会経済のあり方は、決して誰かが示してくれるものではなく、自分たちが足下から作り上げていくしかないことを認識させられたフォーラムとなりました。

「殿様は会社社長と違って、駄目だから交代というわけにはいかない」と相馬氏。社会的責任に真正面から向き合い、大樹町を舞台としてこの震災からどう立ち直るのかという決意である。何も替わりがないのは殿様だけでない。奈須氏は、相馬氏のお話を受けて「俺は殿様なのだ、という腹の据え方」がこれからの北海道の地域づくりに必要だという。「自分がこの地域に住んでいて、他に替わりはいないんだ。同じように見える地域でも、自然環境の視点から見れば同じ地域はない。そこに魅力的な人が加われば、魅力的な地域づくりができる」のだと話された。

未来への光

内山氏の講演の中でも提起された、資本主義、国民国家、市民社会、近代的技術のあり方をどのように編成していくのか。人と人がつながり市民社会をつくり、それを土台として国民国家ができあがる。人と人がぶつかり合うことを避けるために、衝突を解決する行政システムが出来上がった。そしてその弊害が顕著に表れたのが今回の原発事故対応である。

大きな課題を前に絶望的な気持ちにもなるが、今回の話からは身近なところでそれらを乗り越えるような動きが始まっており、目に見える形でさまざまなつながりが出来上がっていることが実感できた。尾田氏からは「これまでの北海道の豊かさは、ある意味で補助金に支えられてきた。しかし、今後は行政とどう付き合うか、つまり行政をどううまく使うのか」が重要であると指摘された。人任せではなく自分たちが行政システムを再構築していくという気概である。

内山氏は最後の挨拶で、今回の東日本大震災で国の行政対応のまずさが露呈したが、それは「政治や国はこんなものなんだ」と認識すること、その限界が見えたという点で重要であったと指摘された。そして日本ではそれを補う地域のさまざまな営みが、こんなにも豊に展開しているのではないか、という言葉には心の底から勇気づけられました。

(北海道地域づくりフォーラム実行委員会事務局 小林国之)

